

### 奄美・沖縄・韓国の兄弟・姉弟婚姻説話

田畑, 博子 / TABATA, Hiroko

---

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

沖縄文化研究 / 沖縄文化研究

(巻 / Volume)

32

(開始ページ / Start Page)

203

(終了ページ / End Page)

234

(発行年 / Year)

2006-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00002737>

## 奄美・沖縄・韓国の兄妹・姉弟婚姻説話

田畑 博子

## 一、はじめに

韓国の口伝説話と、日本に伝承されている口承説話を比較すると、いくつか注目する点があり、それを明らかにすることで、両国の関連性、共通性、また異質性が少しでも理解できるきっかけになるのではないかと考えた。例えばそれは、韓国に伝承されている「創世歌」と南西諸島に伝承されている「ミルク（弥勒）」に関する話との関連性<sup>①</sup>、または長野県諏訪大社に伝承されていた甲賀三郎譚と、韓国に伝承されている「地下の国の盗賊退治」の話との類似性<sup>②</sup>などであった。そしてさらに奄美・沖縄に多く伝承されている兄妹の結婚譚のことにも注目した。これら兄妹婚姻説話については、日韓双方で多くの研究者によってさまざまに論じてこられているが、ここでは特に奄美・沖縄と、韓国の説話の比較検討にしばって論じたい。

この同胞の兄弟姉妹の性的關係にまつわる始祖神話については、兄妹婚姻譚、兄妹始祖神話、兄妹結婚、兄妹相姦説話などと呼ばれている。またこれらの説話についての多くは、始祖洪水説話として伝承されている。そして日本で民間伝承として伝えられている話の分布の多くは、南西諸島に集中している。これらの話は、中国との比較研究がなされているのに対し、韓国との比較研究は進んでいない。韓国は儒教の影響が強いということや、同姓不婚ということなどで、婚姻に関しては日本より制約が厳しかったので、同胞、異母兄弟姉妹の結婚譚は存在しないであろうという既成概念を持たれていたのであろう。しかし韓国にも同異母兄弟姉妹の結婚譚があり、韓国の民譚の研究者によって研究がなされている。それらと奄美、沖縄に伝承されている同胞兄弟姉妹の結婚譚との比較により、奄美、沖縄と韓国との関連を考えてみたい。

## 二、「今昔物語集」の同母兄妹婚姻譚と奄美の伝承と変容

日本の兄妹の婚姻伝承を見ると、古くは古事記の中にあるイザナギ、イザナミの説話、沙本毘古、沙本毘売の説話、木梨の軽太子の説話であろう。この場合は同母兄妹の婚姻となっている。また異母兄妹婚としては、速総別王と女鳥別王の説話が、「古事記」にある。また「宇治拾遺物語」の第五六話に「妹背嶋事」、「今昔物語集」の第二十六巻第十話「土佐国妹兄行住不知島語」に兄妹の婚姻譚がある。この「宇治拾遺物語」と「今昔物語集」の話は、ほぼ同一であるが、これとよく似た話が奄美

にも伝承されている。まずは『今昔物語集』をみてみよう。

### 『今昔物語集』巻第二十六 土佐国妹兄行住不知島語第十

今昔、土佐国、幡多郡二住ケル下衆有ケリ。己ガ住浦ニハ非デ、他ノ浦ニ田ヲ作ケルニ、己ガ住浦ニ種ヲ蒔テ、苗代ト云事ヲシテ、可殖程ニ成ヌレバ、其苗ヲ船ニ引入テ、殖人ナド雇具シテ、食物ヨリ始テ、馬齒・辛鋤・鎌・鎌・斧・鐮ナド云物ニ至マデ、家ノ具ヲ船ニ取入テ渡ケルニヤ、十四五歳許有男子、其ガ弟二十三歳許有女子ト、二人ノ子ヲ船ニ守リ目ニ置テ、父母ハ殖女雇乗ントテ、陸ニ登リニケリ。

白地ト思テ、船ヲバ少シ引居テ、綱ヲバ棄テ置タリケルニ、此二人ノ童部ハ船底ニ寄臥タリケルガ、二人乍ラ寝入ニケリ。其間ニ塩満ニケレバ、船ハ浮タリケルヲ、放ツ風ニ少シ吹被出タリケル程ニ、干満ニ被引テ、遙ニ南ノ澳ニ出ケリ。澳ニ出ニケレバ、弥ヨ風ニ被吹テ、帆上タル様ニテ行。其時ニ、童部驚テ見ニ、懸タル方ニモ無澳ニ出ニケレバ、泣迷ヘドモ、可為様モ無テ、只被吹テ行ケリ。

父母ハ、殖女モ不雇得シテ、船ニ乗ムトテ来テ見ニ、船モナシ。暫ハ、風隠ニ差隠タルカト思テ、此走り彼走り呼ベ共、誰カハ答ヘント為ル。返々求騒ゲドモ、跡形モ無レバ、云甲斐無テ止ニケリ。

然テ、其船ヲバ、遙ニ南ノ沖ニ有ケル島ニ吹付ケリ。童部、恐々陸ニ下テ、船ヲ繫テ見レバ、

敢テ人無シ。可返様モナケレバ、二人泣居タレドモ甲斐無テ、女子ノ云ク、「今ハ可為様ナシ。然リトテ、命ヲ可棄ニ非ズ。此食物ノ有ム限コソ、少シツ、モ食テ命ヲ助ケメ、此ガ失畢ナン後ハ、何ニシテカ命ハ可生。然レバ、去来、此苗ノ不乾前ニ殖ン」ト。男子、「只、何ニモ汝ガ云ンニ随ム。現ニ可然事也」トテ、水ノ有ケル所ノ田ニ作ツベキヲ求メ出シテ、鋤・鍬ナド皆有ケレバ、苗ノ有ケル限り皆殖テケリ。

然テ、「斧・」<sup>ツル</sup> 鑿ナド有ケレバ、木伐テ菴ナド造テ居タリケルニ、生物ノ木、時ニ随テ多カリケレバ、其ヲ取食ツ、明シ暮ス程ニ、秋ニモ成ニケリ。可然ニヤ有ケン、作タル田、糸能出来タリケレバ、多ク蒔置テ、妹兄過ス程ニ、漸ク年来ニ成ヌレバ、然リトテ可有事ニ非ネバ、妹兄、夫婦ニ成ヌ。

然テ年来ヲ経程ニ、男子・女子數産次ケテ、其レヲ亦夫婦ト成シツ。大ナル島也ケレバ、田多ク作り弘ゲテ、其妹兄ガ産次ケタリケル孫ノ、島ニ余ル許成テゾ、于今有ナル。土佐ノ国ノ南ノ沖ニ、妹兄ノ島トテ有トゾ、人語リシ。

此ヲ思フニ、前生ノ宿世ニ依コソハ、其島ニモ行住、妹兄モ夫婦トモ成ケメトナン語リ伝ヘタルトヤ。

新日本古典文学大系37 岩波書店

この話は、次のようなモチーフとなっている。

①他の土地に田を作っていたので、船に道具を積んで田植えに行った。②十四、五歳の男の子と、

十二、三歳の女の子を船の見張りとして置き、父母は田植えの手伝い女とともに陸に上がる。③二人の子供は寝入ってしまった、船が動き出したのに気が付かない。④父母が気が付いたときは、すでに遅く、あちらこちらを探しても見つからなかった。⑤船が島に漂着したので、陸に上がり泣いていたが、女の子が今ある食べ物を食べ、苗を植えて生きながらえようという。⑥兄は納得し、田植えをする。⑦年頃になったので、兄妹は結婚する。⑧生まれた子供もまた結婚し、孫が島に余るほどになった。⑨土佐の国の南の沖に妹兄島があるという。

ここで注目するのは、「二人泣居タレドモ甲斐無テ、女子ノ云ク（二人で泣いていたがどうしようもなく、女子が言うことには）」と、「今ハ可為様ナシ。然リトテ、命ヲ可棄ニ非ズ。此食物ノ有ム限コソ、少シツ、モ食テ命ヲ助ケメ、此ガ失畢ナン後ハ、何ニシテカ命ハ可生。然レバ、去来、此苗ノ不乾前ニ殖ン（こうとなつてはしかたがない、命を捨てるわけにはいかない。有る分だけの食料で命を長らえ、苗が枯れてしまわぬうちに植えよう）」と妹が指示する点である。まずは妹の方が兄に対して、指導的立場に立っている。ここでクライナー・ヨーゼフが指摘するように、男女の相互作用として、人類起源説話の女性の優位性を見ることができるとは、これは広く南西諸島全域に渡って認められている。そして次にこの話と、ほぼ同一の話が奄美徳之島に伝承されているのでみてみたい。

流れ着いた兄妹

昔、昔、大昔、ある国に正直な百姓夫婦が居ました。夫婦には兄妹の子供がありました。

ある年、九歳の男の子と七歳になる妹を舟に残して、両親と手伝い女たちは田植に行きました。舟を少し浜に引き上げただけで、綱をそのままにしておきました。残された兄妹は船の中で遊んでいましたが、いつしか眠ってしまいました。

そのうち潮が満ちてきて舟は浮きあがり、沖へ吹く風はゆらゆら押し流され、沖合いに出ると風がいっそう強くなり、見る見るうちに舟は走り出しました。

目を覚まし、舟が沖のとなかを走っていることに気づいた兄妹は、泣き騒ぎましたがどうすることもできません。

田植を済まして帰ってきた両親は、舟がないので慌てだし、手伝い女たちもいっしょになって探し回りましたが舟は見つかりません。

とうとう諦めて山越えで村に帰りました。

舟の方は、流れ流れてある島の浜辺に着きました。兄妹は陸地にあがり、あたりを歩き回りましたが人一人いません。

無人島だと知った兄妹は急に心細くなり泣きわめきましたが、やがて気を取り直し、舟に積んであったものをおろし、その夜は川べりの洞窟どうくつに寝ました。

翌朝、目を覚ました妹が、

「きつと、父さんと母さんが迎えに来ます。それまでは生きていなければなりません。舟に積ん

であった食べ物がある間は、少しずつ食いつないで生きていきます。食べ物が無くなればそれまでの命です。ですから持ってきた苗が枯れてしまわないうちに植えましょう」と言いました。それを聞いて、

「そうだ。お前の言うとおりだ」と兄も元氣を取り戻し、鍬や鎌などの道具もあるので、早速二人で川の近くに小さな田を作り、苗を全部植えました。

石をかち合わせて火を作ることでも知っていたので、早速火を焚き、魚や貝をとって焼いて食べました。

持ってきた食べ物が無くなると、磯辺に生えているパンや磯ガネフの実を食べ、だんだん慣れてくると、山にわけ入って色々な木の実や山イモを取って食べました。

やがて稲もみのり、食べ物の心配もなくなりました。

兄妹は迎えに来る父母の舟を待ちつづけ、毎日毎日海上を見つめました。舟影は見えませんが、それでも今日は来る、明日はきつと来る」と根気よく待ちつづけました。

やがて二人とも年ごろになり二人は夫婦になりました。幾年かたつうち男の子や女の子がたくさん生まれたので、それをまた夫婦にしました。

大きな島だったので、田をつぎつぎとひろげ、子孫が島に溢れるばかりになりました。

これが、徳之島に人が住んだはじまりだということです。

兄妹が毎日毎日迎えるの舟を待ちつつづけた心は、子孫にも受けつがれ、島の人たちは今でも海のかなたから舟が来ることを待ちつつづけているのです。

『徳之島の昔話』前田長著<sup>⑩</sup>

この話のモチーフは『今昔物語集』の話と一致している。またこの話でも二人が泣きわめき、しかもたなく一夜を洞窟で過ごした後、妹の方が最初に生きながらえる方法について提案をする。そして船に乗ったまま漂流し、船に積んであった鋤や鎌などの道具類によって稲を植えることができ、年頃になった兄妹が結婚し、始祖になるという話になっている。またこれが変容した話として田畑英勝『徳之島の昔話』の「をうなり神」の話を挙げる事ができる。

をうなり神

昔、伊仙に子供三人と夫婦と五人家族が住んでいました。その父親は島流しにされたので、妻は子供三人かかえて機織の仕事をしていました。ところが、右のくつ（機織の足でふむもの）引けば左にすぎり左のくつひげは右にすぎり、子供達が邪魔して仕事ができないので、子供達に「みんな一緒に前の浜で遊んできなさい、繩のついている船はお父さんの舟、切れ繩のついているのは他人の船だから、繩のついている舟に乗って遊びなさい。」というと、子供達は走って行って何もわからず、切れ繩のついている舟ののって流されてしまいました。

三日後に父親が帰って来たので妻が、「子供三名舟に乗っていて流されたのかいなくなったから早く探しに行きましょう。」というと、父親は呑気な顔で、「お前と二人の命さえあれば子供は

また出来るから」といって探しに行こうともしないので、妻は涙ながらに自分の兄さんの所へ行って相談しました。兄は直ぐ舟で探しに行こうといって、兄妹二人港を出、子供達の舟が何処に行っただかもわからないので風まかせに流されていきました。

舟は、やがて、木もあまりない離れ島に着いたので、その島に降りてみると、三人の足跡が残っていました。その足跡を追って行くと山の中にやってきました。

子供達はテーチ木（シャリンバイ）の実を口に入れたまま、一番上の子は三日前に、次の子は一日前位、末の子は朝方に死んだ様子でした。

二人は三人の死体を舟に抱き入れ、その島を離れました。二人で一生懸命漕いで帰る途中で子供達の母親もつかれきってしまい、その兄さんに向っていいました。「この様な状態ではもう私の命もたすかりそうにありません。若し私が死んでも、私は白鳥の姿になって舟の高ともにあって兄さんの航海が無事であるように守ってあげます。高とも止っている鳥はこれからは白鳥ではなく、ユナリ明神と思って下さい。子供達の父が旅行する時にはウンザシとなって、舟の底を喰いあけて舟を沈ませてやります。」と遺言して死んでしまいました。

その兄さんは四人の死体に乗せ、自分の身も助からないのではないかと心配しながら一生懸命舟を漕ぎ、ようやく島近くまできました。その時前方をみると、舟が出ているのでよく見ると子供達の父親の舟でした。喜んで見ていると、突然波風が起って子供の父親の舟は転覆してしまい

ました。

あとはまた、もとの通りに波風もおさまり、無事四人の死体をおろして、とむらいをしたという。

『徳之島の昔話』田畑英勝編<sup>1)</sup>

ここでは兄妹の婚姻という話素はないが、重要な位置に兄が存在し、その兄を守護するヲナリ神に妹がなるという設定になっている。夫婦の関係よりも兄妹のつながりが強調され、濃厚な兄妹の関係が表れている。このような『今昔物語集』の「土佐国妹兄行住不知島語第十」と同型の話の派生と考えられる話は、この話の他に次にあげる「浜千鳥」など、子どもの漂着にまつわる話として、奄美に多く伝承されている。

「浜千鳥」

また、あていてゅうさ。

男の親が死んで、母親一人で四人の男の子を育てていた。長男は船乗りしていたが、弟三人は母親が機織りしながら育てていた。母親は三人の子供たちのためにと思って一生懸命布を織っていたが、ちょうど織り切るころに、その一番末の子供が母親の織っている機のそばにきてじやまをするので母親が、

「海に大きな船がきているから、みんなで浜へ行って、船を見て遊んできなさい。はやくこれを織り切らないとならないから」といって、遊びにやったそう。子供たちはその船に乗って、ま

た、近くの大きな船に乗ろうとしていたが、急に風が変って、台風になり、その大きな船が、台風のために、外海に流されていってしまった。子供たち三人も台風にたたき込まれて死んでしまった。お母さんは布を織り切ったが、三人の子供たちが帰らないので大変悲しがり、泣きわめきながら浜においていったところが、大きな浜千鳥が三羽、その母親を追っかけ鳴いていた。母親は「これはきつと自分の子供たちの魂だろう」と思って、つかもうとしたが、どうしてもつかむことができなかった。そして、母親はその織った布をはさみで切り、

「お前たちのためにと思って、この布を織るまで遊んでこいといったのに、そんなに、お前たちのことを思っていたのに」といっては、布をはさみで切っては飛ばし、切っては飛ばしして、その浜づたいにいったりきたり、布のなくなるまで、泣きながら千鳥を追っていた。

千鳥浜千鳥 朝またま 鳴くな

鳴きば面影ぬ まさていたちゅい

といって、歌を歌い、そのままお母さんも、その浜で死んでしまったそう。

うっさー。

『奄美諸島の昔話』田畑英勝編<sup>2)</sup>

「をうなり神」から「浜千鳥」への変容は、三人の子供が舟に乗って遊んでいるうちに、気がつく」と流されてしまうというモチーフが核となって変容している。「土佐国妹兄行住不知島語第十」の話の話素としては兄妹の婚姻が主体であったのに、「をうなり神」では兄妹の婚姻が消え、子供達の漂

流へと移行し、しかしそれでも兄妹の存在は重要であったのに、「浜千鳥」では兄妹は消え、子供達の漂流譚となっている。そしてここで重要なのは、父親が死んでいるという設定であろう。母親の兄の存在は消えて見えないが、父親の存在は明確に否定しているということである。

### 三、奄美・沖繩の伝承

#### (1) 分類

奄美・沖繩の兄妹姉弟結婚譚についてみると、いくつかの型に分類できる。福田晃は「南島説話の研究」の中で、「南兄妹西諸島の兄妹始祖譚」を三つのサブ・タイプ、(一) 兄妹漂着型 (二) 兄妹降下型 (三) 兄妹同穴型に分類している。

また中国少数民族の洪水神話を研究している村上順子は、Ⅰ洪水がおこり人類滅亡。Ⅱ兄妹が避水具に乗って生き残る。Ⅲ兄妹が結婚して人類を伝える。の三つの要素からの成立を指摘し、①洪水の原因、②洪水の予告と免れる手段の教示、③避水具、④生き残った者、⑤同胞婚の忌避、⑥同胞婚の結果、⑦切り刻むモチーフ、⑧人類起源、の八つの構成要素別に分析している。

この同胞婚、同母の兄妹婚に対してのとらえ方が、分類法の相違点となっているが、本論では次のように分類した。

基本的には核となる洪水説話があり、それらが次第に伝承伝播によって変容していったものと考え

られる。イザナキ、イザナミの神話にみられるように、天の沼矛を下ろしたのは海であり、それら水に関する要素は洪水、海、川に変容している。また洪水の予告に関する説話が、そこだけ独立して新編の白髭水の伝説や、大分の瓜生島伝説などに変容したと考えられる。また生き残った者については、兄妹という伝承が多いが、話素としての女性の優位性からみると、姉弟という伝承を重視したい。そして近親婚のタブーに対して、その合理化としての神占いなどがある。

具体的には、洪水を逃れた兄妹が結婚をして始祖となる①洪水型、そして有名な「古宇利島伝説」などの天から降りてきて、鳥、またはバッタなどの動物によって交道を知るという②天からの降下型の二つに分類する。その下位区分として漂着型を①—A、兄妹が川、あるいは洞穴で結ばれる、川、洞穴型を①—B、また漂着型と降下型との③複合型などに分類できる。一つ一つについて考えてみたい。

#### ①洪水型

①—A 漂着型

①—B 洞穴型

② 天からの降下型

③ 複合型

(2) ①洪水型

①の洪水型を見てみよう。

島建て—兄妹夫婦

大昔、波照間島は食べ物も満ち足り、平和な島だった。人間が増えるにつれ土地がたりなくなり、大きなわらじを作ってよその畑に入って土をつけ、その土を自分の石垣の上に落として畑にしたり、力の弱い人を殺して食べるようにまでなる。神様は島の人々の醜い争いを見て腹をたて、燃えたぎる油雨を降り注いで、地上の生き物を焼きつくすが、神様のめがねにかなった兄と妹の二人だけが洞窟に隠れて助かる。二人は成人して夫婦になり子供が生まれるが、はじめての子は魚のような子だったので、すむ場所を洞窟から岩穴に移すが、二度目の子供もむかでのような子が生まれる。つぎに坂の上に乗のような住居を作って住むと、人間らしい女の子が生まれる。二人は子供を育てるためにもっとよい家を作ろうと、空に並んで輝く五つの星から四つの角と真ん中に柱を立てる掘建小屋を思いつき、土地のよいところを見つけて小屋を建てた。それから島は繁盛するようになり、島の人々は油雨のあとをはじめて生まれた女の子を「新生の婆」と呼んで今も祭っている。

『はが—島・八重山の民話』竹原孫恭編<sup>⑬</sup>

ここでは世の人々が、互いに傷つけ合い、傍若無人になったため、神が怒り、神による油雨によって人々は焼き尽くされてしまうが、ある兄妹が洞窟に隠れて助かり、子孫を残すという話になっている。

る。話素として洞窟というキーワードが含まれているが、洪水という要素からここに分類する。

(3) ①—A漂着型

次に①洪水型の変容したものとして兄妹が海を漂い、島に漂着して結婚する漂着型を①—Aとし、また同様に洪水型の変容として兄妹が川、あるいは洞穴で結ばれる、川、洞穴型を①—Bとした。漂着型①—Aについてはすでに「二、『今昔物語集』の同母兄妹婚姻譚と奄美の伝承と変容」で述べた。

(4) ①—B洞穴型

洞穴型①—Bであるが、次のように洞窟、洞穴、暗河、川が舞台となっている兄妹の結婚譚をこの括りとして考えた。

ウナリ・イーリ

遠い昔、亀徳川の通称「ウトウンジャマ・エー（兄妹洞）」と呼ばれる小さな鍾乳洞の中に仲のよいウナリ・イーリが住みついていました。このふたりは多くの兄妹を生み、亀徳部落を開きました。

亀徳がシマの始まりだといういい伝えが残っています。

『徳之島民話集』水野修採話<sup>⑭</sup>

この話は亀徳からのシマの始まりをといた兄妹の婚姻譚であるが、ここには兄妹の婚姻という特殊

な婚姻に対する説明やこだわりが見られない。また洪水や漂流に関する叙述もない。これに対して次の話は同じ徳之島の話であるが、兄妹の婚姻に対して許されないものという価値観が表れている。

#### ウナリ神様

遠い昔の話です。

検福村に互いに好き合っている若い男女がいました。

ある日のことです。

男は、愛する娘へ、わらぞうりをこしらえてやりました。

娘は、ぞうりがとても美しかったので、自分ではくはもったいないと思い、恋しい男のウナリ

(妹)に、はいてもらったのだそうです。

喜んだウナリは、さっそく美しいぞうりをはいて、検福洞へ水汲みに行きました。

そんなことも知らず牛に水を飲ませるためにやってきた男は、洞穴の入り口に行儀よくそろえられたぞうりを見ると、てっきり愛しい娘が水を汲んでいるのだと思い込み、中には行って行きました。暗い鍾乳洞の中で「わたしなのに、どうして！好きな君なればこそー」という男女の声がしばらくつづいていましたが、実の兄に道ならぬ恋を打ちあけられたと信じ込んでしまったウナリは、死を覚悟で、すべてをまかせてしまったのです。そしてかすかな悲鳴とともに彼女の魂までも、鍾乳洞の奥深く、無数に広がる迷路へと消え去ってしまったのです。

実の兄は、好きな娘が、初体験に恥ずかかしているのだとばかり思っているのだからなんの不信もいがかずに、さっさと家に帰ってしまいました。

夕ぐれ時になってもウナリは、なかなか帰ってきません。

気づかった兄は、かねてウナリとも仲のよい娘のところへ、遊びふけているのだと考え、たずねて行きました。

はじめ、ことのなりゆきがわかったのです。

検福洞の周辺には、村人たちのかざすたいまつがつつき、夜通し、ウナリを呼ぶ人々の声が聞えていました。

それでも、ウナリは、二度と村人たちの前に姿を現すことはなかったのです。

このような悲しいできごとがあつてから、村人たちによって「ウナリ神様」が祭られるようになったそうです。

『徳之島民話集』水野修探話<sup>19)</sup>

ここでは「ぞうり」をめぐっての行き違いがあり、兄妹の婚姻に関しての忌避が見られる。そしてここで重要になるのが、洞窟という場所である。隆起珊瑚礁の島の沖永良部島には、水場として使われている暗河くろがほと呼ばれる洞窟がある。ここは洞窟でありながら、河であるという場所である。ここにも恋人と間違つて結ばれてしまったという兄妹の伝説があり、また先に引用した「流れ着いた兄妹」の話も型としては漂流型になるが、その中に洞窟で一夜を過ごしたという話素がある。これは兄妹の

婚姻譚として伝承されていくうちに無意識に混入したものかと考えられる。またこの洞窟というキーワードを軸に考えると、奄美大島の人々の人口に広く膾炙しているジョーゴの川という兄妹の婚姻譚も忘れることができない。

#### ジョウゴの川

昔、大勝に兄妹があった。妹がたいへん美人であったので、兄が妹に恋するようになった。ある日、あまりに兄にせまられた妹は、「自分には赤尾木にネンゴロ（愛人）があり、今月の十五日の晩ジョーゴを白い馬に乗って通ることになっているので、その男を殺したら兄さんと一緒になれる」といった。兄は妹のいった男を殺しさえしたらと、ジョーゴの川に待ち伏せて、ついにこれを刺し殺した。男と思って殺してみるとそれは男ではなく美しい妹であった。兄は初めて自分の不心得を恥じ、その場で自害して妹の後を追ったという。

それからは小雨降るころなどこのジョーゴを通ると若い女が長い髪を洗っていたり、馬に乗っていく姿が見えたり、またそこを馬に乗って通ると、馬の尻尾を引っ張ったりするともいわれていた。

#### 『奄美の伝説』島尾敏雄・島尾ミホ・田畑英勝編

ここでは明確に兄が妹に恋をしており、妹はそれを忌避している。ここでは場所が川となっており、「小雨降るころ」という話素が、かすかに洪水の名残を感じさせる。

この話は大勝を通るときなど、幽霊が出るなどと今でもよく聞く話であるが、近親婚に対する忌避

の意識がこの話を支えていると考える。

#### (5) ②天からの降下型

次に②天からの降下型であるが、沖縄に古宇利島説話と呼ばれる話がある。

#### 古宇利島物語

最初の人兄妹此の国に降りて来て海岸で貝を拾って生活して居った。或る日海鳥が来て、その首尾を揺かすを見て彼等は交道を知った。その所は今今帰仁村の古宇利島（恋の島）であった。

#### 『南島説話』佐喜眞興英著

この話の中には、「降りてくる」という語があり、天から降下してきたことがわかる。そして海鳥によって交道を知ったとあるが、他の伝承にバツタ、海馬（ザン・人魚）によって知るといふ話や、その他の動物によって知る話もある。

#### (6) ③複合型

次に漂着型と降下型との③複合型である。

#### シマ・ヌ パジマイ

大昔、仲の良い兄妹がいました。兄妹は小舟に乗って、南の広い海の上を進んでいました。そ

れは、風ひとつない凧の日でした。そんな時、そんなに広々とした海のまん中で舟の舵がひっかかってしまいました。

兄妹は「こんな海のまん中に舵がひっかかるとは。」と不思議でならず、兄が着物のすそをあげて、舟から下りて立ってみました。するとそこは浅瀬になっていました。

それからしばらくすると、海水が、ごうごうと周りから引いてしまい、みるみるうちに陸になりました。二人は「天の神様が黄金の島を下さった。」と言って、たいそう喜んで、そこに家、屋敷を構えて住むことにしました。そしてそこを国垣と呼びました。

二人が国垣で仲良く暮らしていたある日、かもめが二羽、庭のガジマルの木に飛んできて、止まり、夫婦のちぎりをしました。兄妹は、それを見まねて、子孫を産み育て、海の幸、陸の幸が豊かみのり、あとあとの世まで栄えたということです。

『与論のしまがたり』菊千代著

この話には、兄妹が直接天からの降下という表現がなく、基本的には漂流型と考えられるが、②天からの降下型の後半部の動物によって交道を知るといふ話素が、同一である。また海を進んでいたが舵がひっかかり、船から降りると海水がごうごうと引くといふ洪水説話を思わせる話素があり、さらに「天の神様」も登場しているところから、複合型とした。

#### 四、韓国の洪水説話の研究

韓国の洪水説話については、多くの韓国の研究者によって研究がなされている。この洪水説話を兄妹、姉弟の婚姻譚をも含め、その他長者池などの沈む村の話の類型に関する研究をしたのは、崔来沃<sup>2)</sup>と千恵淑<sup>3)</sup>などである。

崔来沃は洪水伝説系の範囲に属する類型を次のように分けている。

- ① 「コリボン伝説」
- ② 「行舟型伝説」
- ③ 「洪水兄妹婚伝説」
- ④ 「戦争兄妹婚伝説」
- ⑤ 「ダルレ峠伝説」

また千恵淑は、洪水説話の類型を次のように分類している。

- ① 洪水による地名由来型
- ② 洪水で流されてきた山(島)型
- ③ 行船型の村型
- ④ 洪水で池となった村型

⑤ 洪水と兄妹の婚姻型  
⑥ 洪水と木ドリヨン型

このほかに 権泰孝<sup>33</sup>は、人類起源説話の性格を帯びている韓国の洪水説話の資料を、次のように原因中心と結果中心の説話で区分している。

① 洪水の原因を中心に説明する説話：「石仏の目が赤くなると沈む村」、「長者池」

② 洪水の結果を中心に説明する説話：「兄妹の結婚」、「木ドリヨンと洪水」

この他にも金ゼヨン<sup>32</sup>は、『三国遺事』の文献説話や『高麗史』も含めた資料を検討し、済州島に伝承されている「天地王ボンブリ」との関連を説明しているが、ここではふれない。

五、韓国の説話分類と「兄妹が結婚して人類の始祖になる話」

韓国の説話の分類は、さまざまな研究者によってなされている。類型による分類としては、張徳順、崔仁鶴、曹善雄、モチーフによる分類としては、趙東一などによって分類案の提示がある。しかし朴正熙大統領時代に国家的事業として編纂された、韓国精神文化研究院『韓国口碑文学大系』の分類法がもっとも代表的なものであろう。この分類法は、二分法である。国の旗である太極旗にも見られるように、韓国人の思想の根幹には陰と陽の相反する気が存在する。固有文字のハンゲルも陰陽に基づいているし、説話の分類法にもこの陰陽が用いられている。

兄妹の婚姻説話は大系分類番号435で、「間違った方法で男女関係を完全にする話」の類話となっている。4は「正しいことと間違ったこと」の話で、その下位区分に「41、正しそうで正しい」「42、正しそうで間違っていること」「43、間違っていそうだが正しいこと」「44、間違っていそうで間違っていること」という分類をしている。ここの「43、間違っていそうだが正しいこと」、さらにその下位区分の「間違った方法で男女関係を完全にする話」にこの兄妹の婚姻譚は属し、その中の1という細分類に位置する。

435—1は「兄妹が結婚して夫婦になる話」（人類がすべて死んでふたりだけ残る話）

435—2は「墓の中に引き込まれてあの世に行き、あの世で夫婦になる話」

435—3は「定められた縁はどうしようもない」（どんな方法でも縁を結ぶようになるという話）

このように分類されている。従って神話的要素の強い説話と、世間話的な話とが「間違った方法で男女関係を完全にする話」という枠組みの中で論じられることになる。

(1) 韓国の兄妹始祖譚

韓国の洪水伝説の中で、兄妹が結婚して人類の始祖になる話は、最後の人類となったという状況にもかかわらず、神に占いをし、神意を問うという形を取っている。これは倫理規範からの逸脱を正当化する意識であろう。それは近親相姦に対する否定的な認識が強く作用しているからである。兄妹の

結婚を避けようとする努力が強く表れている。「兄妹の結婚」説話の場合、山の上に登って白を転がし、神の意志を占い、それから始めて彼らは夫婦の契りを結ぶ。また白を転がして神の意志を確認する過程を経た後に、さらにそれぞれ違う山に登って火を起し、煙がひとつになる過程を経たり、ふたりの血を流して溶け合うのを確認したりする占いをしている話がある。どうしようもない状況にあるにもかかわらず、ふたりの結婚のゆるしを神に確認する方法を何度も繰り返す。これは近親相姦を禁忌視していることの証左であろう。

一方、この近親相姦への禁忌は、「タレカン伝説」でより具体化している。洪水は夕立に、山の天辺は山道にと変化を見せているが、姉や妹に性欲を持ったということだけで、弟や兄が自殺することになっている。次に韓国の兄妹の婚姻譚を見てみよう。

## (2) ①洪水型

### 兄妹の結婚

むかし、ある年、三カ月と十日間もの間、雨が降り続くという長い梅雨に入った。まるで天の大きな水瓶からそそぎ続けているかのように雨が降り続いて、この世の中はすべて洪水になり、海になった。平野はもちろんのこと、高い山々も水におおわれ、人々の家もひとつ残らず流されてしまった。

そんな中で、ある兄妹が早めに高い山に逃げたために、洪水からまぬがれることができた。ころうじて命拾いしたのだ。

何カ月かして、水はしだいに引いてきたので、兄妹は村に降りてきたが、山野はすべて荒れ果て、生き残った人は誰もいなかった。物音ひとつしなかった。兄と妹は生き延びるために一生懸命仕事をした。家を新しく建て、農業もやり始めた。

しかし二人は困った問題にぶつかった。兄と妹では結婚はできない。子供がいないと寂しく、また人手も足りない。このようにしては人種が絶えてしまうと恐れた。それで兄と妹は白を持って高い山に登った。そして山のてっぺんで手を合わせて神様に祈った。

「神様、私達は兄妹であるがゆえに結婚できません。だからといって人種が途絶えてしまうのも困ります。いったいどうしたらいいのでしょうか」

兄は雄の白を東に転がし、妹は雌の白を西に転がし、二人は山を降りてきた。山を降りてくると、なんと不思議なことに、東西正反対の方向に転がした白がびったり重なっていた。兄と妹は、「これは二人が結婚していいという神様の知らせだ」

と、結婚することにした。二人の結婚によって人類が途絶えることがなくなって、今日の人々はみんなその兄妹の末裔だそうだ。

『韓国民族説話の研究』孫晋泰著  
金厚蓮・田畑博子訳

この話は同胞の兄妹の婚姻の忌避が意識されており、雌雄の白を山の頂上から転がして神意を問うという赦免の構造がとられている。

(2) ①—B 洞穴型

洞穴型とはしているものの、洪水型からの派生と考えられる洞窟、洞穴、暗河、川にまつわる兄妹の婚姻譚を包括している。

タルレガン江伝説

タンウォルにタルレ江がある。江がなぜタルレ江になったのか。あるとき、姉と弟が川を渡るうとした。すると川に水があふれて渡れなくなった。それで二人は裸になって川を渡った。川を渡るとき、姉が先に川を渡り、弟は姉の後ろから渡った。するとあとから川を渡っていた弟の陰茎が勃起した。弟が姉の裸を見て、性欲が沸いてどうしようもなかった。それで弟は姉より前に行き、川を渡ることにした。

「姉さん、私の後ろをついてきて」

というと、姉は、

「一緒に行こう。ねえ、一緒に行こう」

といい、

「どうしてそんなに早く行くの」

と聞いた。弟はただ

「私は先に渡る」

といって、先に川を渡った。

タルレ江は幅が広い。それが忠州にあるタルレ江である。ところで弟が先に川を渡って川岸に着くと、そこに石があった。それで石を手にとり、陰茎を打ちつけた。弟はいくら陰陽の理は罪がないといっても、姉と弟の間で性欲をおこすなんてとんでもない。死んだ方がましだと思い、弟は石で陰茎を打ちつけて死んでしまった。

ところが弟が死んだことを知らない姉は、ただ弟が石の上に横になっていると思い、

「ねえ、川が深いから私を支えてよ」

といったが、弟はだまって横になっているだけである。そこでやっとのことで泳いで渡ると、弟は死んでいた。それを見た姉は、悲しく、恨めしい。

「悪い奴。こいつ。一度私をなだめすかしてみればよかったじゃない。こいつ。なだめすかしてみればよかったじゃない。なぜ何にも言わないで死んでしまったの。私かたとえ断ったとしても、なだめすかしてみればよかったじゃない。なだめすかもしないで、なぜ死んだの」  
と泣き出した。

そこで川の名前が、「タルレダ（なだめすかす、説得する）」から由来して、タルレ江になったのだ。今現在もタンウオル川と呼ばないで、タルレ江と呼んでいるのだ。忠州のタルレ江となったのだ。

『韓国口碑文学大系7—8 慶尚北道尚州郡篇』崔正如、千惠淑編<sup>230</sup>  
金厚蓮・田畑博子訳

この話は韓国では、タルレダ（なだめすかす、説得する）という言葉からの由来したタルレ江説話として有名であるが、ここでも兄妹の婚姻譚に対する忌避があり、弟の死という結末が用意されている。しかし話の要素も、表現も生々しく、姉弟の姦淫についての強い忌避はありつつも、反語的に伝承の強さが感じられる。

## 六、まとめ

日本本土には伝承の薄い兄妹の婚姻譚であるが、奄美沖繩に色濃く伝承されているのはなぜであろうというのが、最初の疑問であった。本土においての伝承も確認されているが、圧倒的な南島の伝承にはかなわない。また中国の少数民族に伝承されている兄妹、姉弟の婚姻譚の比較により、その類似性が指摘されている。そして韓国の民譚をみていくうちに、その存在の大きさに注目するようになった。

日本にも古来、兄妹、姉弟の婚姻に関する伝承は、存在していたが、時代が下がるにつれてしまい

に忌避されるようになり、伝承もされなくなっていったと考えられる。

韓国では「兄妹の結婚」説話の場合にみられるように、山の上に登り、白を転がし、神意を問うたり、またその後に、さらにそれぞれ違う山に登り、火を起こし、煙がひとつになる過程を経たりしている。そしてふたりの血を流して溶け合うのを確認する。このように避けられない状況にあるにもかかわらず、ふたりの結婚のゆるしを神に確認する方法を何度も繰り返している。これらは日本の伝承には見られない点である。日本では、従兄弟などとの婚姻は認められ、ある程度の近親婚は認められているが、韓国では同姓不婚という厳しいいきまりがつい最近まであり、そういう意味からは、世間の括りとしては日本のほうが緩いように感じられる。しかし伝承としては近親相姦を禁忌視して、伝承そのものが薄くなり、韓国では忌避しながら、なおかつ神意の現われという許しを得て、伝承が継続している。

日本において洪水始祖説話の一つである同胞婚・兄妹、姉弟の婚姻説話は、もともと洪水説話であったものが、漂流譚になり、そこに奄美・沖繩独特の洞窟—これは人々が水を得る生活の場であった—というステージになり、また一方で川という場所が用意されるようになっていったと考えられる。このように洪水—漂流—洞窟・川という変容の仕方が見られる。

この方向とは別に、漂流譚となった兄妹、姉弟の婚姻説話は、兄妹、姉弟の婚姻という話を切り捨て、兄妹、姉弟の漂流譚となり、その後は子供の漂流譚となり、単に母を乞う浜千鳥のような話

になっている。

この洪水説話とは別に、兄妹、姉弟の婚姻説話として天からの降下型の話があるが、これについては建國神話などの影響と考えられる。

次に注目したいのは、この兄妹、姉弟の婚姻譚と、沖繩の人々の意識の中に深く浸透している、姉、妹による兄、弟に対する霊的な守護という「をなり神」の思想との関連である。このをなり神の思想とこの兄妹・姉弟の婚姻譚は密接なつながりがあるろう。

またこれら同じ胞から生まれた者どうしの婚姻譚は、中国においても、韓国においても兄妹という組み合わせの設定には限っていない。姉弟の婚姻譚という場合も見られる。しかし後に儒教的な意識の導入により、男性優位の説話構成がなされたのではないかと考えられる。

注

(1) 『ミロク信仰 沖繩と韓国のミロク説話の比較研究』抽論 『沖繩文化研究29』二〇〇三年発行 法政大学 沖繩文化研究所

(2) 『韓日説話の比較研究 ―地下の国の盜賊退治と甲賀三郎譚』抽論 『日本研究第23号』二〇〇四年発行 韓国語大学校日本研究所

(3) 『南島説話の研究』福田晃著一九九二年発行 法政大学出版社 一一九頁ここでは兄妹始祖譚と兄妹相姦と

区別している。

(4) 『琉球民俗の底流』吉成直樹著 二〇〇三年発行 古今書院 九九頁

(5) 『兄妹結婚』金谷信之「まんだ」北河内地域文化誌70号 二〇〇〇年十一月発行

(6) 韓国では日本の昔話に相当するものを民譚、あるいは口碑文学、口伝説話などと呼ぶ。

(7) 三浦佑之「軽太子軽太郎女の伝承」(『日本文学』二二一九、一九七四)に詳しい。

(8) 福田晃は土佐の沖ノ島にも類似している断片説話の伝承があると指摘している。『南島説話の研究』福田晃著一九九二年発行 法政大学出版社 一一〇頁

(9) 『南西諸島の神観念』住谷一彦・クライナー・ヨーゼフ著 未来社 一九七七年発行 二四九頁

(10) 『徳之島の昔話』前田長英著 一九九四年発行 著作社

(11) 『徳之島の昔話』田畑英勝 昭和四七年発行 自費出版 一九四頁

(12) 『奄美諸島の昔話』田畑英勝 昭和四九年発行 日本放送協会 二五二頁

(13) 『南島説話の研究』福田晃 一九九二年発行 法政大学出版社 一一二頁

(14) 『西南中国少数民族にみられる洪水神話』村上順子(『古代史と日本神話』一九九六 大和書房 一七九頁

(15) 『ばがー島・八重山の民話』竹原孫恭編 一九七八年発行 大同デザインセンター刊 八六頁(『日本昔話 通観26沖繩』同朋社 一九八三年発行 一二七頁)

(16) 『徳之島民話集』水野修探話 西日本新聞社 昭和五一年発行 一一頁

- (17) 「徳之島民話集」水野修採話 西日本新聞社 昭和五一年発行 一二頁
- (18) 「奄美の伝説」日本の伝説23 島尾敏雄・島尾ミホ・田畑英勝編 角川書店 昭和五二年発行 二二頁
- (19) 「南島説話」佐喜眞興英著 大正一一年発行 郷土研究社 四頁
- (20) 「与論のしまがたり」菊千代著 はる書房 一九八五年発行 一九頁
- (21) 「洪水伝説系の範囲に属する類型」崔来沃「韓国口碑伝説研究」一潮閣 一九八一年発行
- (22) 「洪水の話の研究史とその神話的展望」千恵淑「説話文学研究・下」壇国大学出版部 一九九八年
- (23) 「石仏の目が赤くなると沈む村譚の洪水説話的な性格と位相」梅泰孝「口碑文学研究」第六輯 韓国口碑文学会 一九九八年発行
- (24) 「韓国の洪水譚の研究」金ゼヨン「口碑文学研究」第六輯 韓国口碑文学学会 一九九八年発行
- (25) 「韓国民族説話の研究」孫晋泰著 乙酉文化社 一九四七年発行
- (26) 「韓国口碑文学大系7—8 慶尚北道尚州郡篇」崔正如、千恵淑編 韓国精神文化研究院 一九八三年発行